

横浜市小学校社会科研究会

4 学年部会

研修会記録

第 7 号

令和6年 1月 10日

横浜市小学校教育研究会

会長 濱田 哲也

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 本間 宏志

【提案日時】

12月 6日 (水)

提案 佐藤 安世 先生 (北綱島小)

【会 場】

横浜市立北綱島小学校

司会 高森 太郎 先生 (大鳥小)

記録 宮崎 智明 先生 (杉田小)

1 提案内容と単元名

単元名「鶴見川とともに生きるわたしたちに必要なこと」

～自分のくらすまちで想定される水害を知って、備えよう～

2 提案者より

視点②「個を生かし、協働的に学びを深める授業づくり」

→ 一人ひとりが考えをもてるようにするためのICT活用と資料提示の工夫

- とにかく意識をしたのが視点②のところで、子どもたちのみとりを生かして、どうしたら協働的にみんなで学び合える授業ができるのかを考えてきた。今日の本時に至るまでに一番気を付けたことは、資料の出し方で、子どもがこの学習を難しく感じてしまうか少しずつ本気になっていくかは資料を出すタイミング、出し方がポイントだと思っていた。子どもたちに、先に渡しておくことで自分から進んで調べられる資料、ほしいタイミングで提示することで思考が深まった資料それぞれにあった。

→ 協働的な学びにつなげる教師による個のみとり

- 本時資料の「協働的な学びにつなげる個のみとり」には、子どもがどういう考えをもっているだけでなく、協働的な学びにつなげるために、共有したい資料や考えがあったため、指名計画を考えていた。授業をする中で、この手だてで子どもの思考が上手くつながった場面とそうにはいかなかった場面もあったと思っている。自分の中では、発表会にならないように社会科の思考②としての授業にしたいという意識と、より多くの子どもが自分の調べたことや考えたことを話せる場にもできないかという担任としての両方の気持ちがあった。当初考えていた指名計画と違う展開になった場面で、自分の思考が飛んだ場面もあった。

3 協議会

- 教材研究がよくされていた。子どもたちに調べる力がついていて、事前に調べたことで話せていた。既習事項と結びつくこともできたのではないかと。子どもと先生のやりとりの場面が、子どもたちだけで話して解決することができたらよかったとも思うが、それはちょっと難しいのか。
- 個々のみとりを丁寧に行っていたので、意図的な指名で個々の考えをつないで 全員が納得する授業であった。子どもから出された考えを端的に板書していくところから、子どもたちの話し合いが広がる姿が見られていた。子どもは個々で別のものを調べていて、本時では教師から学級全体へと広がる授業であったので、それが子ども同士からこことここにつながっているよという授業になるともっと主体的になる。のではないかと。
- 子どもたちの調べる質が高かった。個々のみとりがあったことで意図的な指名もできていた。実際に水の量で見たことは、視覚的にも分かりやすく、あの場面でさらに理解が深まった子たちもいたと思えたので、手立てとして、とても有効であった。この後から子どもの発言で、本時目標にせまる発言が出てきていたので、ここの時間をもう少し長い時間、聞きたいと思った。そのためには前段部分

をもう少し短縮するのもありなのかなと思った。「流域」や「下流のまち」を子どもはどのように捉えられているのか。

<講師の先生より>西部学校教育事務所 授業改善支援員 山田 仁先生

- ・鶴見川の治水対策が横浜市でとどまらず、川崎や東京都とともに対策しているとうことで追究できたのは、とてもよかった。今日、子どもたちは一人ひとりが持っていた資料をよく自分のものにして、解釈して自分の考えをもってきていた。読み取りや活用の仕方は先生の助言はあったと思うがよく使いこなしていた。
- ・今日の子どもたちは、川幅を拓げることや川底を掘ることなど、単なる調べたことの発表ではなく、なぜその必要があるのか、それがどのように水害を防ぐことにつながるのかをよく考えられていたので、今日の前段の展開が非常に良かった。このようなことをやっていかないと、単に調べたことを発表するだけの表面的な学習になってしまう。
- ・水害を防ぐということに対し、内水氾濫と外水氾濫の違いもよく理解していた。
- ・子どもはロイロノートに自分の考えをまとめ、それをもとに話したが、そこに実験を入れたのは、とても大事。紙資料と、さらに実験で対策同士の協力関係を理解できたことがとてもよかった。
- ・今日は時間はなく、最後に発言した児童の考えをまとめるのではなく、あそこから広げていくといいと思えた。
- ・この教材は本当にいい。ただ中身が難しいので、いかにこの難しいものを子どもに分析、解釈してもらい、問いをつなげていくかは今後実践を積みながらやっていくとよい。

<講師の先生より>鎌倉女子大学 教育学部教育学科准教授 大塚 俊明先生

- ・しっかり教材研究し、しっかり考えられた指導案だと思った。友達に発言につながり、「それはつまり、～ということです。」という発言をしていて素晴らしい子どもたちに育っている。
- ・この単元は、被害と対策の歴史を追っていき、それを年表でまとめるということがすごく大事。そうすると「本気の学習問題」につながる問いがたくさん生まれてくると思う。「多目的遊水地」「遊水地」「緑」「河川の浚渫」がどのように年表の中で位置付いていて、それに従ってどのように被害が減ってきているのかをきちんと整理していくことが一番大事。指導計画をみると、それは学習しているので、今日の「下流を守っているのは多目的遊水地だけじゃない」というのは、子どもたちには自明のことだったのかもしれない。ただ授業の入りところで驚いたのは、17児が「多目的遊水地以外に、他にどのような対策（施設）があるのか調べるのがいい」といった後に、4児が「その対策同士がどのように関係しているのか気になる」と話していた。歴史的な関係は縦の関係であるが、本時ではその対策（施設）が横にどうつながっているのかを見ていくと考えていくと、今日の授業の意味合いは変わってくるので、いいところに目を付けて授業を構成していた。
- ・授業者から「知識ばかりの発表ではなく、子どもが考える授業をしたい」と聞いた。子どものみとりを座席表にする功罪として、指名計画た資料のタイミングが頭によぎり始めると、子どもの話をしっかり聴けなくなることがある。この子は何を言っているのかをしっかりと聴くことは、本当に大事だと自分のこれまでの研究を通して感じられている。
- ・教材は、社会的事象と子どもの生活感（経験）をうまくつなぎ合わせたときに、それが「教材」になる。最初から「教材」があるのではなく、つないであげることが大事。
- ・子どもたちは綱島のまちの子どもで、3年生の学習を通して「横浜市民」になって4年生の学習を通して「神奈川県民」という視点になっていく社会科のプロセスがある。そこに「鶴見川流域民」という視点が入ってくることは、すごく大事なこと。それは行政区分が関係ない区分、横浜市、川崎市、東京都町田市、稲城市である。慶応大学の岸先生の「流域思考」がさらに広がり、新しい自分の軸が子どもたちに生まれることは、すごく大事で、今国民にも求められていることでもある。
- ・「リフレクション（ふりかえり）」に関心をもっている。今、教師のリフレクションが注目されている。最も優れた授業者は、それをきちんと省察して次の授業に生かすことができることで、そういう研究も進んでいる。授業でうまくいかなかったことを「子どもの発見」と捉えて、リフレクションして次の授業に生かしていく、省察をしていくということを考えて次の社会科授業を創造してほしい。